

社会科学研究所 2017 年度春季実態調査 大阪の底力 行程記録

樋口 博美

はじめに

専修大学社会科学研究所では、2017 年度春季実態調査として、2018 年 2 月 28 日(水)~3 月 3 日(土)の 3 泊 4 日で、「大阪の底力」と冠した企画を実施した。その趣意を簡単にまとめておく。

大阪は、江戸時代から「武士の町」ではなく、「町人の町」「天下の台所」としてその名を全国にとどろかせてきた。しかし、現在ではかつての「東洋のマンチェスター」の面影も薄く、さらに近年は大阪からの企業撤退や東京への本社移転が顕著となり、東京一極集中は依然として止まらない。

そのなかで、今回の現地実態調査は「2012 年の『大都市地域特別区設置法』を背景とした『大阪都構想』(住民投票で特別区が設置可能)が国家への地方からの異議申し立てになりうるのか、それと同時に大阪生まれの企業(自動車、薬品、タオル)がグローバル化のなか、どのような企業戦略で企業経営を行っているのか」を検証すべく企画されたものである(社研研究担当福島義和所員)。加えて、大阪のマイナスイメージにもなってきた「あいりん地域」の実態と、その変貌ぶりにも触れるべく私たち一行は大阪に出向いた。以下はこれらの行程の記録である(※文中の写真は筆者が現地で撮影したもの)。全体行程の概要を最初に記しておく。

全体行程概要

2月28日(水)

17:00 研究会 テーマ「大阪の産業構造とその地域的特性」

講師 高山正樹氏 [大阪大学名誉教授] 会場: 天王寺都ホテル会議室

19:00 結団式 (会場: ホテル内レストラン)

3月1日(木)

10:00 横関稔氏 [西成区長] によるレクチャー テーマ「西成特区構想」(質疑応答含)

13:30 武田薬品大阪工場 見学・ヒアリング

3月2日（金）

- 10：00 ツバメタオル株式会社（製織）見学・ヒアリング
- 13：30 ダイワタオル協同組合（染色整理）見学・ヒアリング
- 15：30 泉州タオル館（大阪タオル工業組合）ヒアリング

3月3日（土）

- 10：00 ダイハツ ヒューモビリティワールド 見学
- 14：00 あいりん地区 視察・ヒアリング・質疑応答（NPOの案内による）
- 17：00 現地解散

実態調査の行程とその記録

第1日目：2月28日(水)

14：00以降、今回全日の宿泊先となる天王寺都ホテルに参加者19名が次々とチェックインをし、17：00には全員がホテル5階の会議室に参集、2時間ほどの研究会が始まった。今回の実態調査の現地事前研究会である（写真1）。研究会の報告テーマは「大阪の産業構成の歴史的展開と地域的特性」、講師は大阪大学名誉教授の高山正樹氏をお招きした（写真2）。



写真1：初日研究会の様子



写真2：高山正樹氏

まず古代、近世、近代の地図をもとに、天下の台所と呼ばれた大阪の商都としての歴史、「水の都」としての歴史について、さらに近代以降の明治・大正期の繊維工業を中心とした発展の様子についても、さまざまなデータをもとに解説いただいた。戦後には化学産業のウェイトが大きくなっていくとのことであったが、今回の実態調査の目玉でもある繊維産業が大阪府にとっていかに重要であったかを事前に改めて確認することができた。講演の後半は、大阪経済衰退についてであった。製造品出荷額で見れば、化学、石油・石炭、鋼鉄、金属、生産用機械、

輸送用機械工業といった臨海部（埋め立て地域）の産業がまだまだ大阪を支えていること、また他府県に比して事業所数は多いものの規模が小さく生産性が低いこと、そして全体的に製品の付加価値が低いことが現在の大阪における産業の特徴である。大阪経済の再生のためには、グローバルビジネスに向かなくなっている大阪産業（ゆえに東京への移転が起きる）の高度化（製造からサービスへという意味だけでなく、第二次産業も第三次産業もそれぞれに高度化）の必要と基盤産業の育成が必要であり、そのためには都市計画によるまちづくり、人が魅力を感じて集まる場となることがとても大事である、として高山氏の講演は括られた。直前事前研究会として大変有意義なお話をいただくことができた（※高山正樹先生には、同号に当日の講演内容についても寄稿いただいた）。

研究会終了後には、講師の高山氏にもご参加いただき、同ホテルのレストラン内で結団式を行い参加者同士の親睦を深めた。

第2日目：3月1日(木)

ホテルロビーに8：50集合、9：00に阪堺電車の駅に向かって天王寺の街並みを見ながらの徒歩での出発となった。「新今宮」駅から阪堺電車に乗車し（写真3）、4つ目「北天下茶屋」で下車すると、西へ向かって魅力的な商店街（写真4）を抜け、さらに南海本線天下茶屋駅も突き抜け、15分ほど歩いて西成区役所に到着した。



写真3：社研ご一行様貸し切りの阪堺電車内



写真4：魅力的な地元天下茶屋商店街

訪問地1：大阪市西成区役所

西成区役所では、区長の横関稔氏から大阪市西成区とあいりん地域の概要について、そして西成特区構想についての説明を受けた。使用された資料『私たちのまちにしなり』という西成歴史・地図帳によれば、かつて上町台地を境に東側を東生（ひがしなり）、西側を西生（にしな

り)と呼んでいたそうで、天保期の西成郡はかなり広く、現在の_新大阪、梅田、難波、天王寺近辺も含まれていたようである。大正 14 年に西成区ができる_と今宮を中心に人口が増加し、住吉区とともに公園や行楽地がつくられたものの、工場も多く建てられ「煙の都」とも呼ばれるようになった地域である。

その西成区の北東部にあるあいりん地域は、高度経済成長期の労働力需要の高まりにもなって全国から単身男性労働者が同地域内に集まってきて以来、バブル経済期まで「労働者のまち」として活況を呈していたという。資料にはあいりん総合センター（1970 年～）ができる前のその場所を写した写真（1960 年半ば）が掲載されており、当時の活気が伝わってくる。横関氏によれば「現場行き」のバスが早朝 30～40 台も出ていたとのことで、2 万 4～5 千人の人が集まったという。今現在、あいりん総合センターに集まる人々は数百人程度である。

続いて「西成特区構想」の説明では、バブル経済の崩壊後、求人数も日雇労働者数も大きく減少する中で失業し、あいりん地域内外で路上生活を余儀なくされたホームレスへの対応（生活保護利用による生活サポートは進んだが、生活保護受給率と単身高齢男性比率を高めた）と現在の課題（少子高齢化、不法投棄、治安、結核、野宿生活者）について説明していただいた。これに対して参加者からは、あいりんの名前の由来に始まり、特区構想に関わるコストや大阪都構想との関係について等さまざまな質問が出され、活発な議論が行われた（写真 5）。



写真 5：西成区役所での質疑応答

訪問地 2：武田薬品工業株式会社

天下茶屋駅から地下鉄に乗った一行は、淡路で阪急線に乗り換えると十三駅で下車。駅近くで昼食を済ませてから 10 分ほど歩き、13：30 に武田薬品工場株式会社へ到着した。

武田薬品は、1781（天明元）年に大阪の道修町という薬商の中心地であった地で、薬種仲買商近江屋に奉公した武田長兵衛が、近江屋喜助家からのれん分けを許され、薬種仲買商として

別家、独立創業したことに始まる。私たちが訪問したのは淀川区十三にある大阪工場であるが、現在でも大阪本社と大阪工場地区研究部門は道修町にある。

ここではコーポレートビジネスセンターの野路弓子氏が出迎えてくれた。見学者への説明のための部屋に案内されると、まずは2011年に神奈川県に移転した湘南研究所（ドーム5つ分の敷地面積があるという）の共創性と専門性をキーワードにしたビデオの視聴と、大阪工場と製造部の説明をいただいた。大阪工場は、1915（大正4）年にタケダの薬作りが始まった重要な地である。第一次世界大戦によって西洋医薬品の輸入が困難となり、国内での生産が必要となったため、5代目武田長兵衛がこの十三の地に製造工場を建設したことに始まる。

15:00から工場見学となった（写真6）。案内されたのは1987年に竣工したというC70工場棟で、武田の固形剤の主力工場でもある。ここでは、原材料の供給から製剤、小分・包装、製品出荷の全てのラインがコンピューターによって運転・制御されている。フィルムコーティング錠や一般錠であれば一分間に4,000～6,000錠が生産されているようで、他にカプセル剤や顆粒剤が生産されていた。写真撮影は禁止であったが、通路からのガラス越しに原料を秤量する機械や混合機、製錠機、フィルムコーティング機などの全てを見ることが可能で、野路氏の軽快な大阪トークのリズムも手伝ってその製造工程をよく理解することができた。特に錠剤の検査と武田のシンボルウロコマークの印刷については驚かされるばかりであった。印刷に不備があれば、検査カメラとつながったコンピューターがチェックをして最後に除けてくれるのだという。この錠剤検査は1980年代まで目視で行っていたとのことで、見学コースに掲げられた検査を行う女性たちが写っている大きなパネル写真がその当時をよく物語っていた。現在の完全自動化の工場内では、働く人たちの姿は、1時間以上に及んだ私たちの見学中も時折その姿が見える程度であった。



写真6：熱心な説明と説明に聞き入る参加者

工場見学を終えて、最初の部屋に戻ると武田製薬 100 年史「おおきに大阪！」を視聴した。武田の歴史が紹介されていく中で、生活習慣病に対する新薬への期待が高まった 1980 年代（見学をした C70 工場が出来た時期）に、現在につながる武田のグローバル事業の拡大が加速したこと、複数研究体制の確立が進んでいく様子が把握できた。現在では事業基盤が 70 ヶ国以上に拡大しているとのことであったが、大阪の人たちの感覚からすると、2011 年に大阪工場の研究部門と筑波の研究部門が統合し、武田薬品旧湘南工場跡地に建てられた湘南研究所に移転したことについては今でも違和感があるようであった。ここ十三の大阪工場も 2019 年度中には固形製剤部門を山口県とドイツへの移転を進めていくとのことで生産体制が相当に整備されるようである。その意味で、私たちが C70 の工場を見学できたのは幸運（2018 年 3 月をもって工場見学終了）だったともいえるが、せっかく見せていただいた工程がここからなくなると思うと残念な気もした。終始絶妙な話術で盛り上げながら工場を説明してくれた野路氏も、私たちが訪れた 3 月で“武田人生”を終えるとのことであった。そんな野路氏に玄関口外まで見送られ、私たちは名残惜しく工場を後にした。



写真 7：武田薬品工業での記念撮影（左下はご案内いただいた野路弓子氏）

第 3 日目：3 月 2 日(金)

8:30 に終日貸し切りのバスに乗車してホテルを出発、すぐに阪神高速に乗ると時間通りの 10:00 に大阪府泉佐野市日根野にあるツバメタオルに到着した。この日は、泉州タオル関連の事業所や組合計 3 軒を訪問することになっていた。泉州タオルのルーツは手ぬぐいである。ゆえにタオルは手ぬぐいとサイズがほぼ一緒なのだそうだが、この手ぬぐい文化を継承し、明治

20年に現在の泉佐野市の里井圓次郎氏が発明した打ち出し式の製造法（手ぬぐい製造機械の改良）によって日本で初めてのタオルが製織された（※泉州タオルの詳細については、同号の石川論文、神原論文、川村論文、柴田論文を参照いただきたい）。

訪問地3：ツバメタオル株式会社 [タオル製造業]

大正2年創業のツバメタオル株式会社は、国内で最大規模の生産工場であり、生産量も日本で一番の企業である。有機精錬というエコロジーな製造方法でタオル生産をしていることもこちらの会社の売りである。ツバメタオル到着後、建屋2階の会議室に案内され、まずはツバメタオル代表取締役会長であり、大阪タオル工業組合の理事長でもある重里豊彦氏からお話をうかがった。タオルが他の繊維と異なるところとして、タオル以外の繊維は輸入が95%、国内生産が5%ほどであるのに対して、タオルは22%が国内生産である（昭和の終わりまではほとんど日本で生産されていたという）という歴史的推移についての話に始まり、製造工程が映像化された説明ビデオを15分程度視聴した上で、参加者が2グループに分かれての30～40分程度工場見学となった。24時間操業という工場内は広く、織り工程（写真8）を見せていただいた後、糊抜き・晒し（漂白）・洗浄工程・乾燥・仕上げ工程を終えて戻ってきたタオルの検査と縫製（ヘム縫製など、ここで初めて切り取られるそう）（写真9）を行っている現場を見ることができた。



写真8：工場内の製織工程



写真9：裁断前のタオル

再び会議室に戻ってからの重里氏のお話は、四国の今治タオルを意識された内容であり、それを比較的知り、理解できるという意味でも興味深いものであった。

タオル製造は大きく分けると二種で、先晒しと後晒ししかない。泉州はもちろん後者であり、後晒し工程があることが泉州独特の製造方法となっている。ちなみに、四国では99%が先晒し、

大阪タオルは99%が後晒しである。後晒しの特徴はその吸水性にあるとのことで、重里氏は実際に後晒しタオルを水に落としてあっという間に沈んでいく様子を実演して見せてくれた（写真10）。



写真10：タオル実演をするツバメタオル代表取締役会長 重里豊彦氏

ただ、この「吸水性の高さ」は泉州の業界の人々にとっては長い間あまりに「当たり前の事」であったため、その宣伝・発信が今治から遅れを取った（「吸水性」が宣伝上の戦略と強みになるとは思ってもみなかった）そうで…この話は実直に良いもの目指して一筋にタオル生産をしてきた泉州の“人となり”ならぬ“地域となり”を物語っているようでもあった。

訪問地4：ダイワタオル協同組合〔タオル染色整理業〕

日根野のイオンモールで昼食休憩を取った後、一行は午前中に訪れたツバメタオルからは車で15分ほどのところにある泉佐野市南中樫井のダイワタオル協同組合に到着した。タオル協同



写真11：ヒアリングの様子



写真12：ダイワタオル工場内見学（左：北川晃三氏）

組合は1950(昭和25)年に泉州の地場メーカーが織るタオルの後晒しの共同加工場として設立された。タオル漂白、染色整理、新商品・新技術開発、共同購入、販売がその業務内容である。

ここでは、協同組合の顧問であり、この道40年以上という技術者でもある北川晃三氏に出迎えられ、しばらくお話をうかがった後に、糊抜から乾燥仕上げまで36工程あるという工場内の見学となった。



写真13：精練・漂白工程

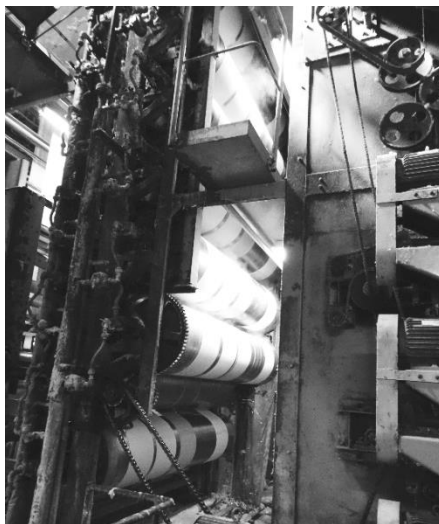


写真14：乾燥工程

トウモロコシのような天然成分を用いた糊抜きや抗菌加工、無機塩で加工した防災タオル(You Tube で防災タオルによる火消し実演をする人が続出して問題になったとのこと)のような高機能タオルの製造を、北川氏を中心に次々と手がけてきた工場である。



写真15、写真16：バクテリアによる汚泥活性処理の様子(屋上)

工場見学の最後に案内されたのは、意外にも工場の屋上であり、そこではバクテリアによる汚泥処理が行われていた（写真 15,16）。

現在工場内には 90 名以上のスタッフが働いているとのことで、地元の若者が多いようであった。皆、一様に明るく挨拶を交わしてくれるのが印象的であった。

訪問地 5：大阪タオル協同組合

先のダイワタオルに興味を惹かれた参加者が多かったため、大阪タオル協同組合へは予定より少し遅れての 15:30 の到着となった。組合事務所は泉州タオル館内にあったが、入り口ロビーには、色も綺麗な優しい風合いの様々なメーカーのタオルが展示されており、購入できるようになっていた。買い物の時間を取らねばならない、と思いつつ 2 階の会議室に案内され、ここでは専務理事の樫井学氏にご対応をいただいた。

組合で最も力を入れていることは「いかに消費者に知ってもらうか」ということであるという。たとえば、りんくうタウンでも泉州タオルを展開しており、3 年で終了の予定だったが延長されて今でも人を集めることができている。一方で、異業種との関係を新展開させようとする動きもあるものの続けていくのはなかなか難しそうであるし、流通・販売に関していえば、（ツバメタオルでも重里氏から一部話があったように）泉州では問屋の力が今でもかなり強いようで、メーカーと問屋の関係についてその場で深く語られることはなかったものの、メーカーの生産に影響している現状をうかがい知ることができた。

現在組合員は後晒しの 4 社で 200 名ほどを占めることになるようだが、900 名程度であるという。地域には夫婦で経営する小さな事業所が多く、後継者問題（平成 23 年には少し上向きになったそうだが）や、各所の織機も古くなってくること等への懸念があるという。

とはいえ、先に訪問してきたツバメタオルやダイワタオルのような、品質の向上と付加価値を追究してきた人々やメーカーの努力とこだわりが反映され、かつ市場性のある「泉州こだわりタオル」（平成 15 年登録）を完成させるなど、生活する人たちにとって身近な地域一体のものづくりが目指され、維持されてきたことが樫井専務理事の言葉から伝わってきた。

第 4 日目：3 月 3 日(土)

8:30 ホテルを出発し、地下鉄御堂筋線から阪急線に乗り継ぎ、9:30 に池田駅に到着した。ここからタクシーに分乗し、10:00 前後にダイハツヒューモビリティワールド (Humobility World) へ到着した。

訪問地7：ダイハツヒューモビリティワールド

ここは、体験型展示を中心に「楽しみながら学び、体験・発見できる施設」として、近隣の小学校の社会科見学を常時受け入れているという。2階のガイダンスルームに通された一行は、ダイハツの現在の自動車生産工程DVDを視聴の後、同階の「ダイハツの原点」（産業用エンジンと三輪自動車の展示）と、3Fの「いつの時代もくらしの真ん中に」の展示を中心にガイドをしていただき、ダイハツ車の変遷（つまりはダイハツの歴史）に照らし合わせながらの私たちのくらしの変化を追体験した（もっとも、途中からは実体験の振り返りになったわけだが…）。ここにはファシリティサービス事業部でヒューモビリティワールドの副館長白井智仁氏が付いて下さり、参加者の個々の質問に応じていただいた。

ダイハツは、近代工業化の進む1907年にエンジンの国産化を目指した「発動機製造株式会社」の設立に始まる。船舶用から出発して、その後農業、工業を支える企業としての志を持って発展してきたという。現在の自動車生産につながる最初の製造は、1930（昭和5）年に誕生した三輪自動車HA型ダイハツ号であった。「大阪にある発動機製造会社」という社名が略されて「ダイハツ」と呼ばれていたため、そのままそれを商品名にしたという。当時、道幅が狭く、町や家が密集している日本の実情にマッチしたものであったこと、特に小口荷物を運ぶ中小企業にとって使い勝手が良かったこと、さらに当時三輪自動車は運転免許が不要であったことも人気博す要因であったようだ。



写真17：人気を博したダイハツ号
(HD型)



写真18：1957年発売ミゼット
小回り利く屋根付き三輪トラック

参加者の「懐かしい」という声がかしこであがっていたのが「いつの時代もくらしの真ん中に」の展示フロアである。戦後から現在までの各年代の身近なくらしの様子と、当時のダ

イハツ車がカラフルな実車で紹介されていた。サラリーマンにも手が届く家族向けの車の登場（フェロー1966年）、広く快適で燃費の良い車の登場（シャレード1977年）、働く女性が乗りこなせる車の登場（ミラ1980年）、子育てにも便利なお母さんの日常車の登場（ムーヴ1995年）…といったように、日本人の生活様式に密着したものづくりが行われてきたこと、その日本人の家族の変化を意識しつつ、また日本人の「家族」意識に影響を与えつつ、成長してきた会社であることを感じた（※ヒューモビリティワールドの詳細については同号の鈴木論文を参照いただきたい）。

ダイハツヒューモビリティワールドを後にした一行は、池田駅前に戻り、既に予約をしていた蕎麦屋で短い昼食休憩を取ると、再び阪急線に乗って次の予定地へと急いだ。

訪問地8：あいりん地域

実態調査の最後は、釜ヶ崎のまちスタディーツアー（フィールドワーク）であった（※あいりん地域の詳細については、同号の飯田論文、福島利夫論文、福島義和論文を参照いただきたい）。釜ヶ崎のまち再生フォーラムが協力、萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社が受け入れとなっているフィールドワークであり、ツアーのねらいは「釜ヶ崎の貧困（不安定雇用と社会的孤立による貧困、及び「男の貧困」）を体感し、そこで暮らしてきた人々の人生にも触れつつ、長年の不信と対立を乗り越えて内発的まちづくりが進んでいるようすと、市場原理による混乱状況の両面を観察する（※行程モデル表記載）」ものである。

大阪市立大学の西成プラザに集合すると、まずはNPO法人釜ヶ崎のまち再生フォーラム事務局長のありむら潜氏によるパワーポイントを使った事前レクチャーを受けた。漫画『カマヤン』の著者でもあるありむら氏の描く主人公カマヤンが画面に出てきて少し和ませてくれるとはい



写真19：ありむら氏の話聴く

え、釜ヶ崎の歴史と日雇い労働者や生活保護受給者の厳しい暮らしの様子、そして現在注目を浴びている釜ヶ崎の「まちづくり」の経緯と現状について、とても深く、濃い内容をものすごい早さで説明するありむら氏からは、あいりん地域特有の生活意識と地域性がどこからくるのかをしっかりと理解する必要があると同時に、そんな独特なまちの問題点を解決しながら良い面（「包摂力」だそうだ）を伸ばしつつ「もう一度ふるさとにしよう」という冷静だけど強い思いが伝わってくるのであった。

その後、私たちは、ありむら氏と、フィールドワーク立ち寄り先の一つであるサポーターハウス「おはな」のオーナーである西口宗宏氏がそれぞれ率いる2つのグループに分かれ、釜ヶ崎のまちあるきを開始した。

筆者が加わった西口氏のグループで案内していただいたコースは、あいりん総合センター（寄り場、シェルター並び場、労働福祉センター、職安、医療センター）→NPO 釜ヶ崎支援機構・高齢者特別清掃事業詰所→NPO 路木（衣服縫いサービス）→萩之茶屋小学校跡、西成市民会館→サポーターハウス「おはな」である。

「おはな」では、すでに生活保護受給者の方々から私たちの懇談のために待っていてくださった。75歳のHさんと62歳のGさん、82歳のH・Mさんからその人生と釜ヶ崎へ入ったいきさつ、そして今の気持ちについて聞くことができた。皆穏やかではあったが、現代社会の生きづらさをダイレクトに受けてきたことを感じるお話の内容であった。これら語り部として対応してくれたのは皆「高齢」の「男性」である。そして「建設関係の仕事」の経験者であり、「日雇い」で生きてきた。まさに釜ヶ崎の象徴のような人々であった。

ありむら氏と西口氏の熱のある案内にすっかりはまり込んでしまった一行は、その後まだ30分以上あるフィールドワークの行程を残しての解散時間となってしまう、一旦そこで、春季実態調査の終了解散とした。そのあと残った7名でフィールドワークを再開し、ありむら氏が案内についてくれた。後半は、四角公園→三角公園（炊き出し・野外テレビ有り）→ふるさとの家・子どもの家→難波屋（西成ジャズ）→ひと花センター（単身・高齢・生活保護受給者の社会参加と生活支援を行う）・西成保健福祉センター分館→太子地区のバックパッカータウン発祥エリアでのホテル見学といった具合であった。18時近く、筆者が関西に住んでいた1990年代前半～後半のイメージからはほど遠くなっているまちの様子に心底驚いている間にフィールドワークは終了した。ありむら氏に感謝の意を伝えて、私たちはあいりん地域を後にし、今回の実態調査のすべてが終了した。

おわりに（謝辞）

今回も行く先々で多くの方々に丁重に対応いただき、とても興味深く充実した時間を過ごすことができた。

ご協力いただきました訪問先の関係者の皆様方にはこの場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また、実態調査に先立っては、2018年2月2日に事前研究会を開催し、3名の先生方にご報告いただいた。まずは、水戸部啓一先生（専修大学経済学部兼任講師、国際環境経済研究所理事）に「日本の自動車産業を取り巻く潮流と課題」と題した自動車産業の現状について報告をいただいた。そして、社会科学研究所の長尾謙吉所員には「泉州のタオル産業—生産システムの特徴と縮小下の課題—」を、小池隆夫所員には「(大阪・「西成」～1990年代初頭以後の25年に焦点をあてて)」と題し、解説をしていただいた。調査対象地への事前の理解を深めることができたことをここに改めて御礼申し上げます。